

行われた。これは自分たちの祖先がかつて行った解釈を宣教師の解釈に置き換えて行く過程に他ならないが、そこでは当時の秘儀的文字やメシア的時間といった重要な争点がトータルに欠落することになった。結果的にかつてのメシア運動における「書物」「主権」のモチーフが「想像困難」となり、この「想像困難」な部分が前述の、預言者による予告→キリスト教の到来→宣教師による民族語の文字化→きたるべき政治的自立へ、という、典型的な民族主義的プログラムによって置き換えられることになり、ラフの解放を唱えた「先覚的キリスト者」としてのアシャフチュ像、アシャフチュの後継者としてのクリスチャン・ラフという自己規定が「正史」として「想像可能」になっていった。

## マレーシア・サバ州カダザン人のエスニシティとキリスト教

山本博之

あるエスニシティの誕生を問題にするためには、まず「エスニシティの誕生」が何を指すのかを明らかにする必要がある。別の形で問い直すとすれば、エスニシティの誕生の前後でいったい何がどう変わるとみなされているのだろうか。

自らの生命を犠牲にしても自らの帰属する集団のために戦おうとする独立戦争のイメージと重ねあわせるまでもなく、いったんエスニック・グループが誕生した後では構成員どうしの横の結びつきの強さが強調されることになる。エスニック・グループを民族衣装に喩えるのもこれと同じ発想であるといえるだろう。ここでエスニシティの誕生とは、「われわれ〇〇人」なる言説と同時に横の連帯が発生することとして捉えられていると言えるだろう。

根源的紐帯なるものを完全に打ち崩す、すなわち横の連帯がはじめから無条件に存在しているとは考えないという立場をとり、なおかつ誕生後のエスニック・グループが横の連帯を持つことを前提にするのであれば、横の連帯がいったいいつどうやって成立したのかという厄介な問題を抱え込むことになる。

これを避ける1つの手として、エスニシティを「自らがあるエスニック・グループに属するという意識」という言説のレベルに限ることが考えられるが、これは問題を先送りしたことにしかならないだろう。エスニシティは単に人間分類の方法として問題になっているのではなく、それぞれの社会においてそれ以上の影響力をもっているかに見える状況があるという点で問題になっているはずである。そうである以上、エスニシティを問題とする上でその点を避けて通るわけにはいかないのではないか。

サバ州はマレーシアにあって住民のサバ人意識が強く、連邦政府に対して常に反発する傾向にあると内外からみなされている。それを裏付けるような事例を挙げることはたやすい。しかしサバ内に目を向けると、サバの人々は文化的に多様な人々からなるだけでなく、さまざまな集団に分かれてお互いの対立が絶えず、決してサバ人として1つにまとまっているわけではない。これを説明しようとサバ人をさらにムスリム／マレー人、カダザン人、華人などのエスニック・グループに分けて、それぞれ自民族意識が強いためにお互いに対立するという説明も試みられているが、その自民族意識が強いとされているカダザン人に目を向ければ、やはり内部でさまざまな集団に分かれてお互いに対立している状況にたちまち出くわすことになる。

しかし、カダザン人が文化的に多様な人々からなり、しかも横の連帯が存在しないからといって、「カダザン人なるエスニック・グループは存在しない」と言えば問題の解決にな

るわけではない。「カダザン人のため」というスローガンは今でもサバ内で流通しており、しかもそれが一定の影響を持っているように見えることも否定できない。分析の枠組みにすることが困難だからといって、「カダザン人」にかかわる現象までなかったことにしてしまうわけにはいかないのである。

この「カダザン人」という分類が意味を持っているように見える現象をさしあたってカダザン人のエスニシティと呼ぶことにすれば、カダザン人がエスニック・グループであるのか否か、そしてその場合エスニック・グループとは何かという問いをとりあえず棚上げにしておいて「カダザン人」なるエスニシティの誕生を考えることができるだろう。そしてそのためには、エスニック・グループの構成員どうして横の連帯が生じるという前提を排する必要がある。

以上の問題意識をふまえ、独立前後のサバにおける権力観を検討することを通じて、カダザン人なるエスニシティの誕生を明らかにすると同時にサバ(あるいはマレーシア)においてエスニシティとは何であるのかを考えたい。

## 民族・宗教・国家－1950年代以降のバリ島社会とヒンドゥー

永渕康之

ヒンドゥー的とうたわれるバリの宗教は、現時点で「バリ人」の同一性を保証する明らかな指標となっている。インドネシア社会あるいは国際社会からの他者表象としてもバリ人による自己表象としても、この指標は承認されている。実際の宗教実践を見ても、隣接する他の社会との特異性はきわだっている。「エスニティー」としての「バリ人」を語る時、宗教は種差的差異を代表する指標と言っていいたいだろう。

1950年から1965年にかけて、つまりインドネシア共和国の独立から共産党員虐殺事件までのいわゆる旧体制期において、バリ島社会では宗教に関する重大な出来事が進行した。宗教の制度化と合理化である。バリ島の宗教を代表する機関がこの時期に設置され、宗教の知識が教義として整備されていった。また一連の出来事は、中央政府にたいする対抗運動として展開した「民族的」な闘争という側面を持っていた。バリ独自の自治宗教省が設立され、ジャカルタの宗教省にたいしてヒンドゥー部門の設置を要求する運動を展開したのである。

一方、この時期のバリ社会の状況は、民族闘争という概念の裏に想定されている社会の統合性を根底的に裏切る事態におちいていた。社会秩序の統合をもたらず権威の崩壊のすえにあらわれた社会分裂である。日本軍制期まで維持されていた旧王家を代表とする統治機構は崩壊し、権威の真空地帯となったバリには中央の政党政治や経済政策の影響が露骨に浸透した。諸派に分裂する政党勢力が拡大し、1960年以後、国民党と共産党の二大勢力による社会分断は決定的となり、その結果が1965年から1966年にかけてのインドネシアでも最大規模の共産党員の虐殺であった。

現在バリでは、1950年代に制度化された組織と合理化された教義にもとづいて州政府を運営主体にした巨大な儀礼が繰り返されている。伝統儀礼がこうして公的な儀式として国家の官僚主義体制のもとで再生産されているのである。同時に、「宗教はわれわれの魂である」という宗教をめぐる本質主義的な語りは現在一般化している。宗教の制度化と合理化が成立するにいたった過程はこうして文化をめぐる本質主義のなかで隠蔽され、乗り越えられた過去に追いやられ、バリの宗教世界が時間なき伝統として立ちあらわれている。忘